

総合的な学習の時間

高等学校普通科における総合的な学習の時間の構想に関する一考察

- 「課題研究」「産業社会と人間」の実践を生かした学習活動の立ち上げに向けて -

宮城県気仙沼高等学校 手代木 章宏

概 要

現在高校は、多様な興味・関心をもつ生徒を抱えている。その中には学ぶことの意味や価値を見いだせない生徒も存在する。そのような生徒に学ぶことの喜びを再発見させる契機として総合的な学習の時間が期待されている。本研究では、小・中学校での実践や高校における類似の教育活動の分析を通して、高校における総合的な学習の時間の望ましい在り方とそれを含めた教育課程の在り方などについて考察した。

1 主題設定の理由

(1) 生徒・教師の実態から

日頃世界史の授業をしていて、様々な生徒に出会う。例えば、授業の内容を十分理解できず、消極的な学習態度を見せる生徒や、「世界史を勉強して何になるのか」と発言するなど、学ぶこと自体に疑問をもつ生徒がいる。他方で、授業だけではもの足りず、もっと詳しい話が聞きたいという生徒もいる。もちろん、生徒の実態に応じて個別指導をしたり、課題解決的手法を用いたこともある。しかし、それはあくまで生徒全員に同じ内容を理解させるためであり、興味を示さない生徒が出てきてしまう。私は、これら双方の生徒の知的不満足に十分こたえられないジレンマを感じてきた。

(2) 今日の課題から

新学習指導要領（以下、新要領と略記）は、小・中学校では平成14年度から完全実施、高校では平成15年度入学生から年次進行で実施される。新設された総合的な学習の時間については、現在、小・中学校で試行的実践が積み重ねられている。その内容や方法について、生徒・教師・地域それぞれの立場で理解が深まりつつある。しかし、それに比べて、高校における総合的な学習の時間への取組は、現在のところ大変に遅れている（図1参照）。普通科の本校では、進学率向上を目指して教科指導を重視しており、平成15年度入学生の教育課程編成作業で、各教科がいかに単位数を確保するかを考えている現状である。そのため高校における総合的な学習の時間が、単に小・中学校で経験した内容の繰り返しに終わったり、将来的には、かつての必修クラブ活動のように形骸化することが懸念される。

そこで、高校における総合的な学習の時間を構想するにあたり、次の二点に着目することにした。第一は、小・中学校での総合的な学習の時間の実践である。平成15年度以降の高校入学生は、全員が既に小・中学校で総合的な学習の時間を経験してくることになる。したがって、小・中学校で実際に行われている総合的な学習の時間の実態を知ることが、高校側にとって重要であると考えられる。第二に、高校での「課題研究」「産業社会と人間」の実践である。職業教育を主とする学科における原則履修科目である「課題研究」は、生徒が自ら設定した課題の解決を図る学習を通して、「専門的な知識と技術の深化、総合化を図る」（文献[1]引用）とともに、主体的な学習態度を育てることをねらいとしている。総合学科の原則履修科目である「産業社会と人間」では、生徒に自己の在り方生き方や進路を考察させる指導が求められている。これらの科目を実践している各高校では、様々な創意工夫を生かした取組が行われている。そして、新要領解説には、「これらの経験を生かすなどして総合的な学習の時間の学習活動を展開することが望まれる」（文献[2]引用）と述べられている。

以上の小学校、中学校及び高校における教育活動を参考にし、児童生徒の発達段階を踏まえることで、小・中学校での経験の上に行われる、高校における総合的な学習の時間の望ましい在り方をどのようにとらえ、それを他の各教科・領域とどのように関連させ、具体的にどのような形で教育課程に

組み込んでいくことができるのかを考察するために、本主題を設定した。

2 研究の目標

小・中学校における実践事例を分析し、高校における類似の教育活動を参考にすることにより、高校における総合的な学習の時間の望ましい在り方を探り、総合的な学習の時間を組み込んだ教育課程の例や、具体的な学習活動及び指導の展開例を試作する。

3 研究の方法と内容

3.1 文献研究

- (1) 仙台市を含む県内の小・中学校における総合的な学習の時間の実施状況について分析する。
- (2) 総合的な学習の時間と各教科・領域との類似点や相互のかかわりの在り方について探る。

3.2 調査研究

3.2.1 高校における総合的な学習の時間に関する調査

(1) 調査のねらい

各高校の総合的な学習の時間への準備状況について調査し、本研究の基礎資料とする。

(2) 調査の対象と方法

調査対象

平成13年度宮城県高等学校新教育課程説明会総則部会に出席された、公立・私立を含む県内の全日制、定時制、通信制の高校及び特殊教育諸学校高等部、合計108校。

調査期間

ア 調査実施・回収：平成13年7月24日（火）

イ 集計・分析・考察：平成13年7月～8月

調査方法

質問紙法（選択技法，一部自由記述法）

(3) 主な調査内容

総合的な学習の時間へ向けた校内の取組について

準備状況，校内体制，教職員の共通理解，実施予定年度，実施予定単位数など

総合的な学習の時間の展開について

実施期間，学習課題の設定，活動形態，指導形態，学習内容，学習活動など

(4) 回収結果

調査票の回収状況：98 / 108校（回収率90.7%）

この調査は、事前に通知していない状態で、当日説明会に出席された先生方に、分かる範囲で回答していただいた。したがって、回答結果が必ずしも学校全体の意思を反映するものとは限らない。

3.2.2 高校における「課題研究」「産業社会と人間」に関する調査

(1) 調査のねらい

県内の高校で実践されている「課題研究」「産業社会と人間」の実施状況について調査し、その実態と課題を明らかにすることで、高校における総合的な学習の時間の望ましい在り方を考察する手掛かりとする。

(2) 調査の対象と方法

調査対象

仙台市を含む県内の総合学科・職業学科（衛生看護科を除く）を置く公立全日制高校，合計39校。

調査期間

ア 調査票送付：平成13年6月～7月

イ 調査票回収：平成13年7月～8月

ウ 集計・分析・考察：平成13年7月～8月

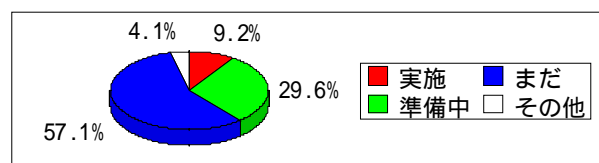


図1 本県高校の総合的な学習の時間への取組状況（3.2.1のアンケート調査結果より）

調査方法：質問紙法（選択技法，一部自由記述法）

(3) 主な調査内容

生徒の学習活動の実態について

学習形態，学習内容，活動集団，課題設定，活動場所，学習成果の発表方法など

教師の指導の実態について

単位数，実施時期，校外学習時の指導体制，評価の在り方，必要経費など

(4) 回収結果

「課題研究」に関する調査票の回収状況：36 / 39校（回収率92.3%）

「産業社会と人間」に関する調査票の回収状況：6校（総合学科5校＋その他1校）

「課題研究」については，同一学校でも学科によって実施状況が異なる学校があり，その場合には学科ごとにカウントした。したがって，分析・考察の対象総数は，70の学校・学科とした。

3.3 理論研究

文献研究及び調査研究の結果に基づき，以下の点について考察する。

(1) 高校における総合的な学習の時間の基本的なとらえ方について

(2) 総合的な学習の時間を組み込んだ高校の教育課程について

(3) 総合的な学習の時間の具体的な学習活動及び指導の展開について

4 研究の概要

4.1 [生きる力]と総合的な学習の時間

平成8年7月の中央教育審議会第一次答申は，これからの学校教育の在り方として「子供たちに[ゆとり]を確保し，[生きる力]をはぐくんでいく」ことを基本とし，「一定のまとまった時間(以下，『総合的な学習の時間』と称する。)を設けて横断的・総合的な指導を行うこと」(以上，文献[3]引用)を提言した。平成10年7月の教育課程審議会答申は，[ゆとり]の中で各学校が特色ある教育を展開し，児童生徒に[生きる力]を育成するため，教育課程の基準の改善のねらいを掲げている(文献[4]参照)。

そして，新要領解説では，総合的な学習の時間の創設の観点として，次の二点を挙げている。一つは，これまで「多くの知識を教え込むことになりがちであった教育の基調を転換し，自ら学び自ら考える力を育成することを重視した教育を行うこと」であり，もう一つは，「生徒一人一人の個性を生かす教育を行うためには，各学校が生徒や地域の実態などを十分踏まえ，創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開すること」(以上，文献[2]引用)である。したがって，総合的な学習の時間とは，各学校が創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で，生徒一人一人の個性を生かし，生徒が自ら学び，自ら考え，工夫する機会を与える，学びの自由化であると言える。

4.2 小・中学校における総合的な学習の時間の実施状況

小・中学校における総合的な学習の時間の実施状況を分析し，その特徴を明らかにすることで，小・中学校での経験の上に行われる高校での総合的な学習の時間の望ましい在り方を考察する手掛かりとしたい。分析においては，仙台市を含む県内公立小・中学校で，平成12年度に総合的な学習の時間を実施し，報告書などを提出している，小学校75校，中学校33校を，各学年単位で分析対象とした。

4.2.1 小学校における総合的な学習の時間の現状

(1) 分析の結果

今回の分析を通して，多くの小学校では，全校又は学年で共通テーマを設定し，その下で年間に複数の学習内容に取り組みさせていることが分かった。学習内容については，図2の通りである。中学年では地域，環境，健康・福祉などの身近な内容が多く，高学年になると生き方，興味・関心に基づく学習活動が少しずつ増えており，自由研究として取り組ませる学校も見られる。また，六年では地域が非常に多い。学習方法では，おおむね教師が共通テーマや単元を準備し，学習活動の過程で，児童が取り組みたい学習課題を決め，主にグループ単位で調査や体験を行うことになる。指導体制は，学

年単位での指導が主流だが、学級単位での指導も多い。

(2) 分析結果の考察

分析結果から、総合的な学習の時間が非常に活発に展開されている様子がうかがえる。小学校では、一つ一つの単元名が具体的、限定的で、児童に活動を促す表現になっている。例えば、「われら米コメ隊」「牛乳パックのリサイクル」「会津丸かじり」などである。学習内容は、新要領で具体的に例示された国際理解、情報、環境、健康・福祉の四分野が多い。また、各学年の教科学習や特別活動の内容とかがわりの深い分野が多く見られる。例えば、三年の地域や四年の環境は、社会科でのくらしやゴミに関する学習との関連が強い。六年で地域が多いのは、修学旅行と関連させた形で実施している学校が多いためである。また、自由研究については、他の単元と組み合わせて、年間に数時間から十数時間程度で実施している学校がほとんどである。

(3) 子どもの発達段階とのかかわり

子どもの発達段階から考えると、「児童期の思考は具体的である」。「具体物の範囲であれば、多少目新しいものであってもかなり論理的に考えることができるし、概念的・抽象的な理論というものを考え出すことができる」。また、児童期は同調性が強いために、「集団的に行動しやすい」(以上、文献[5]引用)という特徴がある。したがって、校外に出て具体物に触れながら、集団で体験的な学習を行うことができる総合的な学習の時間は、小学校の児童に適した学習活動を提供できると言ってもよい。他方、今回の分析結果から推論すると、児童自らが課題を設定し、自ら学習活動の計画を立てることが、実際にはなかなか難しいようである。そこで、教師側の支援として、共通テーマや単元を設定し、児童の思考範囲を意図的、計画的に限定することが必要となってくるのであろう。

4.2.2 中学校における総合的な学習の時間の現状

(1) 分析の結果

今回の分析では、中学校の場合、まだ手探りの状態にある学校も多く、特定学年のみの実施事例も見られた。実施形態は、小学校と同様に、全校又は学年ごとに共通テーマを掲げている学校が多い。しかし、一年間に実施する単元数は、小学校に比べると少ない傾向がある。学習内容は、図3の通りである。一年で職業が多く、学年が進むと環境や自然が減少し、逆に進路が増加してくる。また、その他として、学校行事や教科学習の補充を行っている学校も見られた。学習方法については、小学校と大きな違いがない。指導体制も、小学校と同様に、学年単位が主流である。

(2) 分析結果の考察

中学校の特徴として、共通テーマがより抽象的になっている。例えば、「生きる」「社会」などである。学習内容の種類が小学校と比べて少ないのは、まだ実施年数が少ないためであろう。また、特別活動と関連させた内容が多く見られる。例えば、一年の職業は、これまで学級活動で行われていた職業調べを活用しているようである。三年の進路は、ほとんどの生徒が高校に進学するという現状から、具体的には生徒一人一人の興味・関心に応じて、高校について調べたり、高校を訪問している。生徒にとっても切実な問題であるだけに、学習意欲の高まりが想像される。また、図3から直接読み取ることにはできないが、三年の国際理解、地域、職業・産業などの分野で修学旅行の自主研修の時間を活用し、首都圏にある大企業や諸外国の在日大使館などを生徒に訪問させている学校が多い。

(3) 子どもの発達段階とのかかわり

中学生の時期になると、子どもには身体的変化とともに、精神的にも自我の安定が一時的に崩れていく現象が見られる。自己を特別視する傾向が強く、他者の自己に対する評価や態度に動揺しやすい。そのため、他者とかがわりをもつことや自分の内面を表現することに困難を感じるようになる(文献[5]参照)。こうした子どもの発達段階と今回の分析結果を合わせて考えると、中学校における総合的な学習の時間は、積極的な他者とのかかわりを通して、自己のよさや存在意義を見つめ直すきっかけを、生徒に提供しようと試みているように思われる。そのことが、健康・福祉における交流学習やボランティアが各学年で実施されている点に反映されているのであろう。

高等学校普通科における総合的な学習の時間の構想に関する一考察

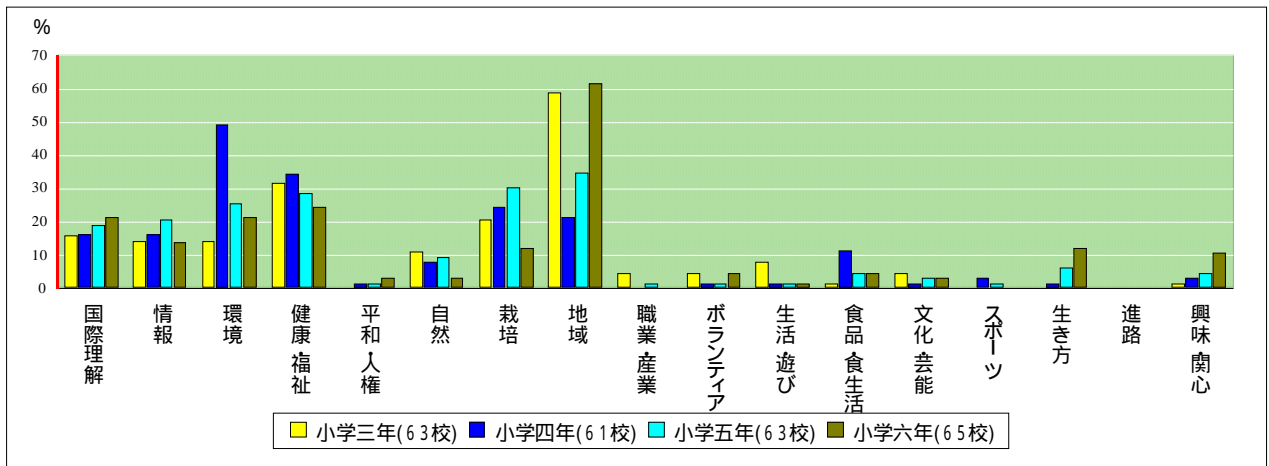


図2 小学校における総合的な学習の時間の学習内容と実施校の割合（文献研究より）
（ ）内の数字は、分析対象校総数を示す。

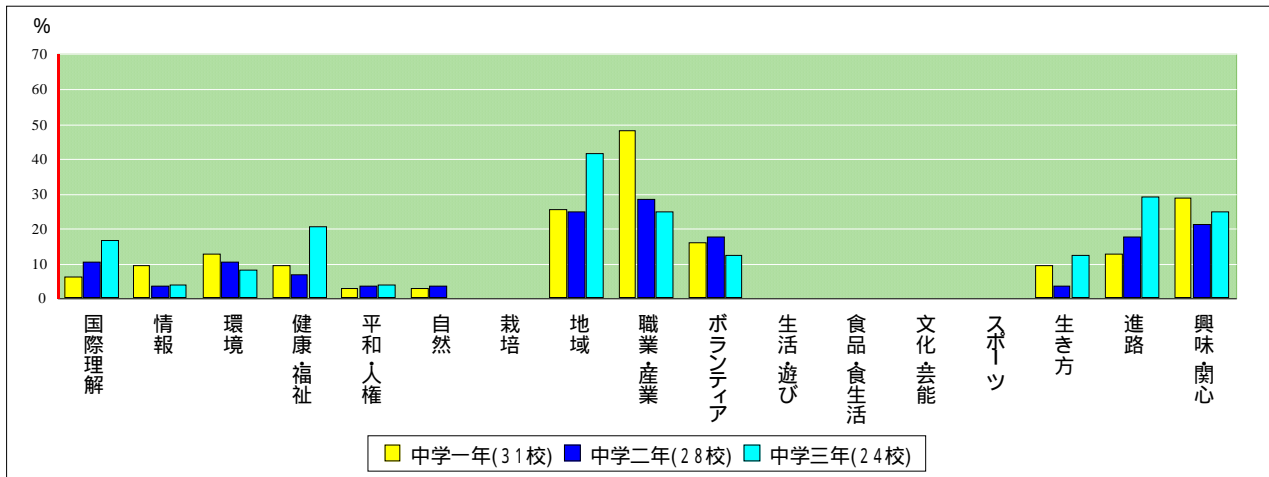


図3 中学校における総合的な学習の時間の学習内容と実施校の割合（文献研究より）
（ ）内の数字は、分析対象校総数を示す。

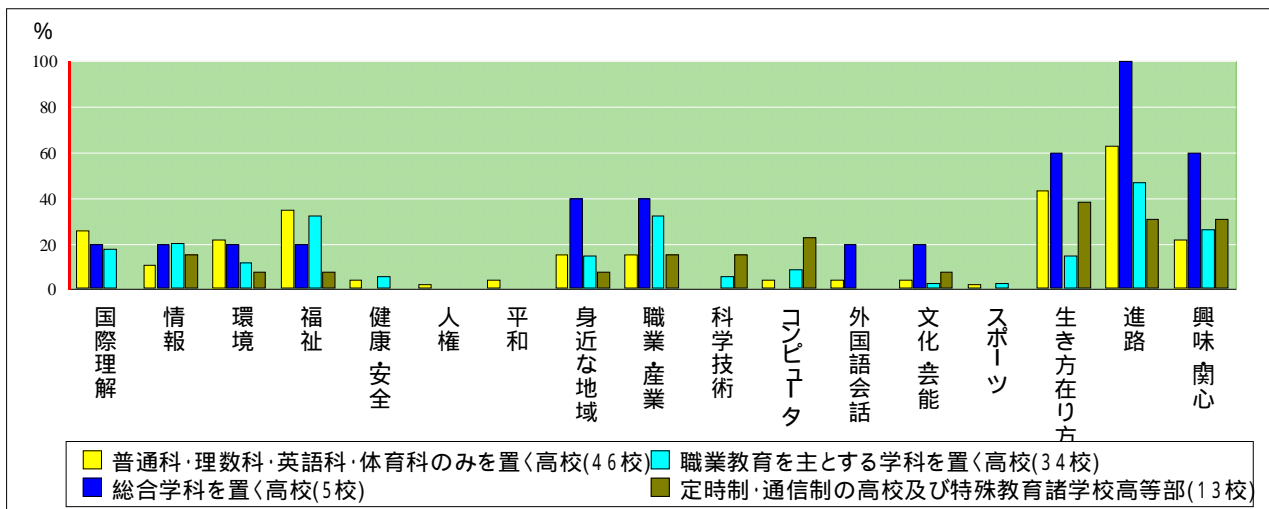


図4 高校における総合的な学習の時間の学習内容と実施予定校の割合（3・2・1のアンケート調査結果より）
（ ）内の数字は、調査対象校総数を示す。

4.2.3 小・中学校における総合的な学習の時間の特徴

今回の分析結果とその考察から、小・中学校での経験の上に行われる高校における総合的な学習の時間の望ましい在り方を考察する上で参考となるべき特徴が、いくつか明らかになってきた。

(1) 共通テーマ及び単元の設定

小・中学校では、児童生徒の興味・関心にある程度の方向性をもたせるため、全校又は学年ごとに共通テーマや単元を設けていることが多い。この背景には、児童生徒の思いや願いを全面的に尊重するだけでは、効果的で有意義な学習活動を展開しきれないという教師側の戸惑いを感じることもできる。確かに、北海道立教育研究所が平成11年7月に実施した意識調査によれば(文献[6]参照)、小・中学校の児童生徒が学習したいと思う内容と、教師が学習させたいと思う内容には、大きな隔たりがある(図5参照)。また、教師は限られた時間に、多くの児童生徒を安全に活動させなければならない。そのような視点からも、児童生徒の活動のある程度限定することが必要になるのであろう。

他方、小・中学校では、一年間に多くの単元を設定し、児童生徒に複数の異なる学習内容へ取り組ませる場合が多い。確かに、児童生徒に考えさせたり、体験させたいことはたくさんある。児童生徒の学習意欲の持続期間という視点からも、複数の単元が必要であろう。しかし、それぞれの学習活動の深まりという点から考えると、年間に取り組む学習内容の数は、できるだけ少ない方が望ましい。

(2) 小学校の学級別担任制と中学校の教科別担任制

総合的な学習の時間に対する取組に、小学校と中学校の間で温度差が感じられる。その背景の一つとして、教師の教科担当の制度における違いがある。小学校では、原則として一人の教師がその学級の全教科を指導する。したがって、小学校では、一人の教師が児童にとって総合的な存在と言える。また、小学校でも毎日の時間割は定まっているが、教師は児童の反応によって、急きょ教科を変更して授業を行うとも不可能ではない(もちろん、後に各教科の時数を調整することになる)。総合的な学習の時間に、学級単位で校外に出て、長時間活動することも比較的容易である。このように、学級における学習者と授業者が、原則的にどの教科でも変わらないのが、小学校の最大の特徴でもある。

一方、中学校では、学級担任とは別に、教科担任が各教科の教育計画に沿って年間の授業を行う。確かに、授業の実施状況や進度などは、適宜学級担任に連絡される。しかし、学級担任と教科担任との連携の度合いが、小学校とは異なる。例えば、学級単位で校外学習活動を行う場合、十分に前もって、同じ学級を担当する各教科担任の承諾を得た上で、時間割を変更するなどの手続きが必要になる。このように同一の学習者に対して複数の授業者が存在する中学校では、学級単位による活動の自由度が低く、各教科の独立性が高い傾向がある。したがって、各学級や個々の生徒によって様々に学習活動が異なることがある総合的な学習の時間に、学校全体として取り組むことが容易ではないのだろう。

(3) 総合的な学習の時間と学校行事とのかかわり

多くの学校が総合的な学習の時間を様々な学校行事と関連させて実施している。例えば、野外活動・修学旅行などの遠足・集団宿泊的行事や、学芸会・合唱コンクールなどの学芸的行事、飼育栽培活動・地域清掃活動などの勤労生産・奉仕的行事などである。確かに、総合的な学習の時間は、既存の教科などの枠を超えた横断的・総合的な学習を実施できる時間として創設されている。また、新要領解説では、学校行事と他の教育活動との有機的な関連を図ることが求められている(文献[7・8]参照)。したがって、総合的な学習の時間を学校行事と絡めて実施すること自体を否定することはできない。しかし、特別活動や学校行事のねらいと、総合的な学習の時間のねらいを十分に把握し、比較

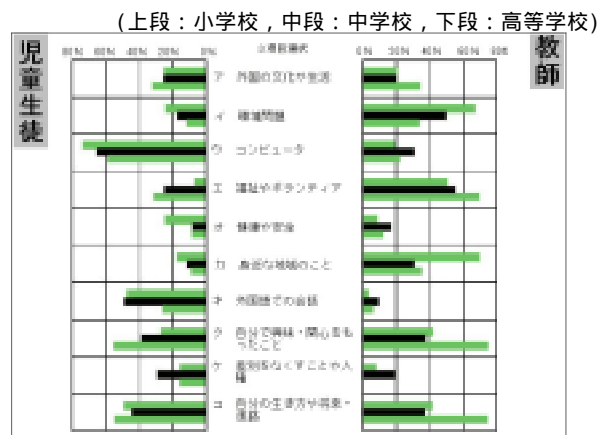


図5 「学習してみたい内容」の児童生徒と教師の比較
北海道立教育研究所平成12年度研究紀要指導資料より引用

・検討した上で、それぞれを実施することが大前提であることを、熟知しておかなければならない。
 (4) 児童生徒の総合的な学習の時間における学習経験そのもの

児童生徒は、小・中学校での総合的な学習の時間において、既に様々な今日的課題や地域の諸相にかかわってきている。メディア・リテラシーについても、我々の想像以上に急速に普及しつつある。一部には、高校の教師間でそれほど使われていないソフトウェアを、小学生の段階で使いこなしているケースも見られる。高校側としては、平成15年度以降の入学生が、出身小・中学校によって多少の差はあるとしても、それらの学習活動を既に経験していることを考慮しなければならない。

4.3 高校における「課題研究」「産業社会と人間」の実施状況

4.3.1 「課題研究」について

(1) 調査結果の分析

今回の調査結果によると、本県の職業学科(衛生看護科を除く)・総合学科を置く公立全日制高校では、約90%の学校・学科が、三年次に2単位以上で「課題研究」を実施している(図6参照)。授業は、一年間通して実施している事例が多かった。しかし、学期を限定して実施している事例や、14~28日間の短期間で集中的に実施している事例もわずかながら見られた。一回の活動時間については、2時限連続での実施が45件(64.3%)、1時限での実施が12件、3時限以上連続での実施が9件であった。学習形態は、個人又はグループ学習がほとんどであり、活動集団は、学科ごとにまとめて活動している事例が多い。

学習内容は、作品製作が50件(71.4%)、次いで資格取得49件、研究48件、調査44件と続くが、産業現場実習は10件(14.3%)と少なかった(図7参照)。学習課題の設定主体については、教師による設定と教師が設定した複数の課題から生徒による選択という回答を合わせて43件(61.4%)、生徒による主体的な設定という回答は27件(38.6%)であった(図8参照)。また、46の学校・学科が、活動途中での学習課題の変更を認めている。

学習活動に対して、校外協力者がいるのは25件(35.7%)。内訳は地域の人々や職業人・専門家が少なかった。生徒の校外学習活動については、「課題研究」を履修している生徒の全員又は一部が行っている学校・学科を合わせると、全体の半数の35件である。校外学習活動の提案主体については、教師が28件、生徒が13件となっている。校外学習活動の場所としては一般企業が18件、次いで校外協力者の施設、公共機関となっている。その他として、河川、海や野生植物の自生地などが挙げられた。実施期間は、三日間以下が18件。活動時間は、2~3時間が10件であった。中には、20~25日間での実施や、一日8時間の活動という回答もあった。校外機関との交渉を誰が行うかについては、教師が行うという回答が31件(88.6%)。生徒が主体的に行うという回答と、教師の指導の下で生徒が行うという回答を合わせると6件(17.1%)であった(図9参照)。

学習成果の発表会について、実施していないという回答が12件だけで、他の多くの学校・学科では何らかの形で発表会を開催している。開催の時期としては、ほとんどが学習活動終了時に2~4時限連続で行っている。他に中間段階での実施が13件、学習課題設定時の実施が1件だけあった。学習成果をまとめた報告書を作成する学校・学科は全体の70%を超えているが、学習成果を広く一般に公開している学校・学科は、10%をわずかに超える程度であった。

指導体制については、いずれの学校・学科でも複数の教師が同時間に指導に当たっている。6名以下という回答が多かったが、20名以上の教師が参加しているという回答もあった。教師以外の評価主体については、生徒自身による自己評価が40件(57.1%)、生徒同士による相互評価が16件(22.9%)、校

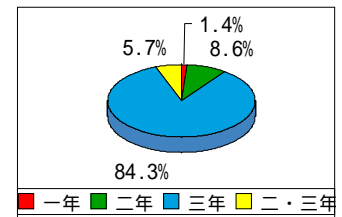


図6 「課題研究」の実施学年

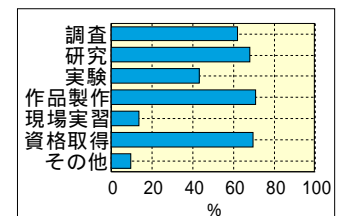


図7 「課題研究」の学習内容

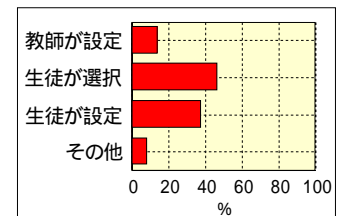


図8 学習課題の設定主体

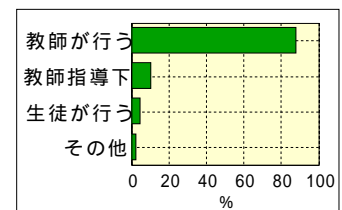


図9 校外機関との交渉主体

外協力者による評価が6件あった(図10参照)。生徒の「課題研究」に対する取組状況については、90%以上の学校・学科から、よい又はおおむねよいという回答が得られた。

「課題研究」を実施する上で、生徒及び教師が苦労している点について、代表的な回答を表1及び表2に挙げておく。

最後に、各校の総合的な学習の時間に向けた取組については、二つの学校・学科で新しい学習活動を試行している一方で、45(64.3%)の学校・学科が「課題研究」で代替の方針であることが分かった。

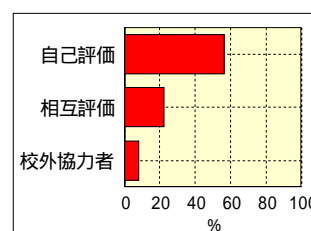


図10 教師以外の評価の主体

表1 生徒が活動する上で苦労する点

課題の設定ができない。 年間の活動計画が立てられない。 必要な資料が手に入らない。 学校の施設・設備などが不足している。 基礎的な知識・技術が不足している。 学習意欲が長続きしない。 グループ内の人間関係に苦労する。 自主的な学習活動になっていない。
--

表2 教師が指導する上で苦労する点

生徒の活動意欲や集中力をいかに継続させるか。 学習課題が多すぎて、対応しきれない。 生徒の自主性を尊重すると時間がかかりすぎる。 つい教師が手を貸してしまいがちになる。 同じ質問に何度も答えなければならない。 指導教員の人数不足や知識の不足。 学校の施設・設備の不足や予算の不足。 企業からの協力を取り付けるのが困難。
--

(2) 調査結果の考察

実施形態について

「課題研究」は、それまでに習得した知識や技術を生かすという科目の性格から、当然最終学年での履修が考えられる。そして「課題研究」の学習活動や他の科目の履修を考え合わせると、2単位程度が最も適当なのであろう。ただし、通年で実施している学校・学科が多いために、生徒の学習意欲の維持が大きな課題となっているようだ。短期間に集中的に実施している学校・学科は、この点を考慮しているのであろう。また、一回の活動時間についての調査結果を、専門分野ごとに検討すると、商業に関する学科では一回1時限の実施が、農業・工業・家庭に関する学科では一回2時限連続の実施がほとんどである。さらに、一回1時限実施の学校・学科では、学習内容に職業資格の取得が多く、一つの例外を除いて、作品製作が含まれていないことが分かった。つまり、各学校・学科では、生徒の学習内容に合わせて一回の活動時間を設定していることが分かる。

学習内容について

学習指導要領に示された内容がいずれも実施されているのだが、産業現場などにおける実習が少ないのは意外であった。学習課題の設定については、全体的に教師の主導で行われているという印象が強い。農業・工業に関する学科では、施設・設備、作物、履修科目などの関係で学習課題が限定されるようだ。他方で、家庭に関する学科における作品製作などは、生徒一人一人が自分の興味・関心に応じて様々な作品製作に取り組んでいる様子が見える。また、生徒の一部は、何を学習課題に設定すればよいのか分からなかったり、あまりにも壮大な目標を掲げて現実に活動しきれないでいる。したがって、現時点では、生徒の学習課題の設定時に、教師がかかわることはやむを得ないであろう。

また、活動途中で学習課題の変更を認めている学校・学科が多い。これは生徒の興味・関心に学校側が柔軟に対応しているということであろう。しかし、生徒の自由な発想に対して、学校の施設・設備や学習時間・場所などの制約から変更させざるを得ないという側面もある。学習活動における生徒の自主性を最大限に尊重したいが、現実の諸条件を考慮すると、研究活動がいかに困難な事であるかを生徒に理解させることも必要なのであろう。

校外とのかかわりについて

「課題研究」では、校外とのかかわりがそれほどもたれていない。一部の生徒が地元地域の企業などを訪問して調査したり、現場実習をしているが、学習活動全体で占める割合は、それほど大きくない。校外学習活動の提案や校外機関との交渉も、ほとんど教師の手で行われているのが現状である。

学習成果の発表について

ほとんどの学校・学科で学習成果の発表会が行われている。学習活動終了時に一回だけという事例が多い。報告書も作成するが、校外への配布は少ない。校外への公開の度合いは低い状態である。

指導体制と評価について

職業学科では、専門教科の複数教師による指導が定着している。総合学科では、当該学年中心の集団指導体制が採られ、最大66名の教師がかかわるとい学校もあった。評価方法については、生徒の自己評価がかなり導入されているが、生徒の相互評価を生かせる機会は少ないようだ(図10参照)。

4.3.2 「産業社会と人間」について

(1) 調査結果の分析

「産業社会と人間」は、総合学科の原則履修科目としてだけではなく、最近では職業学科や普通科でも学校設定科目として取り入れられている。今回の調査結果から、次のような全体像がうかがえた。

実施形態について

今回調査したほとんどの学校で、実施学年は一学年、単位数は2単位であった。実施期間は、通年実施と前期のみ実施が3校ずつであった。活動時間は、一回2時限連続が基本で、必要に応じて一回1時限や4時限連続に変更して実施しているようだ。学習形態は、内容に応じて、学年・学級・グループ・個人と様々であった。活動集団については、学年ごと・学級ごとの事例が多い。全学年が同時に活動している学校も1校あった。

学習内容について

学習内容は、表3の通りである。なお、「産業社会と人間」の一環として課題追究型の学習を取り入れているのは2校であった。

校外とのかかわりについて

学習活動における校外協力者の活用は、4校で導入されている。校外協力者の内訳は、地域の人々、職業人、上級学校の人々に限定されている。校外での学習活動は、すべて教師によって企画され、外部機関との交渉も、ほとんどの学校で教師が行っている。

指導体制と評価について

担当教師の数は、多くの学校が10名前後で、平均週一回の打合せを実施している。また、4校では、生徒に「産業社会と人間」担当係を割り当て、運営上の補助的な役割を与えている。教師以外の評価主体としては、生徒の自己評価を5校が取り入れているが、生徒同士の相互評価を導入している学校はなかった。生徒の取組状況については、ほとんどの学校で、おおむねよいとされている。

(2) 調査結果の考察

「産業社会と人間」の最大の特徴は、職業・産業や進路・将来の人生へと、学習内容を焦点化した教育活動という点である。これらは、従来特別活動の中のホームルーム活動で行われてきた進路指導などのガイダンス機能をより充実させた活動と言える。従来の進路指導では、進路指導主任などの講話、ホームルーム担任によるプリント資料などを使った説明、卒業生による経験談などの活動が行われてきた。これらの活動は、学年全体で一斉に行われることが多い。しかし、学びの場が校外に及ぶことは少なかった。「産業社会と人間」では、表3に見られるように、多岐にわたる学習内容が提供されている。また、それぞれの内容に合わせて、学年・学級・グループ・個人などと、様々に形態を変えて学習活動が行われている。学びの場は、教室や校内施設にとどまらず、年間に何回もの校外体験学習が設定されている。これによって、入学年次の生徒でも、無理なく具体的なイメージを抱きつつ、自己の将来を考えることができるように配慮されている。また、学習内容に応じて、一回の活動時間を変えるなどの変化をもたせている。他方で、担当教師間の打合せや外部機関との連絡など、毎回の学習活動へ向けた準備が大変忙しいという声が寄せられているのも事実である。

表3 「産業社会と人間」の学習内容と実施校数

職業	職業理解	6校
	職場訪問	5校
	職場体験	1校
	職業講演	5校
進学	上級学校理解	5校
	上級学校訪問	4校
	上級学校体験	1校
	進学講演	1校
社会 地域	社会地域理解	3校
	施設訪問	4校
	福祉体験	1校
	ボランティア体験	0校
生き 方	自己理解	6校
	心理テスト	4校
	生き方体験	0校
	生き方講演	2校
	ライフプラン作成	6校
学 び 方	学校適応	2校
	ディベート	1校
	科目選択ガイド	5校

4.3.3 総合的な学習の時間に向けて

今回の調査結果から、高校の「課題研究」における学習活動の過程が、小・中学校の総合的な学習の時間と非常によく似ていることが確認できる。その大まかな流れは次のようになる。

リインテグレーション 生徒の学習課題設定 生徒の主体的な学習活動 学習成果のまとめ・発表

なお、高校の「課題研究」では、小・中学校における総合的な学習の時間のように、学校又は学年共通テーマが設定されることが全くなかった。しかし、職業学科では、それぞれ専門教科の教育目標を実現するために多くの科目を設けており、「課題研究」はその一つである。「課題研究」における学習活動も、特定の専門分野への指向性を有することになる。したがって、生徒が自分の所属する学科の専門分野から大きく逸脱した学習課題を設定することはないと思われる。

これは、「課題研究」を総合的な学習の時間と比較した場合の、大きな相違点であると言えよう。したがって、総合的な学習の時間のねらいに近づくためには、学習内容の選択範囲を広げたり、主に教師主導で行われている学習課題の設定を、可能な限り生徒の主体性に任せることが望まれる。

「産業社会と人間」では、各学校で様々に創意工夫を凝らした活動が展開されている。その幅広い学習内容は、総合的な学習の時間においても大いに参考になるところである。また、各種施設への訪問・見学や体験学習などでは、複数の候補地を準備し、希望に応じて生徒が主体的に選択できるようになっている。しかし、それらの学習内容や活動を企画・立案しているのは、すべて教師であり、生徒からの発案という事例は、ほとんど見られない。さらに、生徒自身による自己評価はかなり導入されているが、生徒同士による相互評価が全く行われていない。生徒が学習内容や活動の企画・準備段階に能動的にかかわることを可能にしたり、生徒同士の相互評価を導入することで生徒の評価力を伸ばすことができれば、総合的な学習の時間のねらいにより一層近づくことができるであろう。

また、表1及び表2に示した問題点は、これから実施される総合的な学習の時間においても、同じように現れると思われる。したがって、それらを念頭において、指導上の工夫を図る必要がある。

4.4 総合的な学習の時間と各教科・領域のかかわり

新要領や解説によると、各教科・領域はそれぞれの目標や内容をもっている。しかし、その一部には、生徒に主体的に課題を追究させたり、学び方やものの考え方を身に付けさせることを目標とするなど、学習内容や方法において総合的な学習の時間と共通する部分があることも事実である。そこで、総合的な学習の時間と各教科・領域のかかわりについて、いくつかの例を挙げて考察してみたい（総合的な学習の時間と各教科・領域を関連させた年間教育計画については、5.2を参照）。

4.4.1 総合的な学習の時間と各教科のかかわりについて

新要領では、公民科の目標として、「人間としての在り方生き方についての自覚」（文献[1]引用）を育てることを掲げており、各科目に現代社会の諸課題を追究させる学習を取り入れている。科目現代社会では、大項目(1)「現代に生きる私たちの課題」において、生徒の主体的な学習を重視するとともに、調べ方や学び方の学習に重点を置いている。その際に、「中学校社会科及び道徳並びに公民科に属する他の科目、地理歴史科、家庭科及び特別活動などとの関連を図る」（文献[1]引用）とされている。また、国立教育研究所（現在は国立教育政策研究所）の谷田部玲生氏は、大項目(1)への導入として、「小・中学校時代の『総合的な学習の時間』で作成したレポートや作品などを持ち寄るなどして、小・中学校時代の『総合的な学習の時間』を振り返ることから学習を始める」（文献[9]引用）ことを提案している。さらに、「公民科で身に付けた課題追究の方法は、高等学校における『総合的な学習の時間』に活用することが可能である」（文献[9]引用）とも述べている。

理科は、各分野 科目の最後に大項目「課題研究」を位置付けている。これは、各分野における発展的な研究をすることによって、問題解決能力の育成を目指している。そして、生徒がどのような課題を採り上げ、どのように研究を進めるかという点で、それまでの総合的な学習の時間における生徒の学習経験を生かすことが期待できる。また、各社の教科書にある「課題研究」の進め方に関する記

述は、総合的な学習の時間を指導する際に、すべての教師にとって大いに参考になるであろう。

新要領によれば、国語表現の指導に当たっては、例えば次のような言語活動を通して行うようにするとされている(文献[1]引用)。

- | |
|---|
| ア 自分の考えを明確にして、スピーチ、発表、討論などを行うこと。 |
| イ 観察したことや調査したことを記録したり、まとめて報告したりすること。 |
| ウ 相手や目的に応じて、案内、紹介、連絡などのための話をしたり、文章を書いたりすること。 |
| エ 身近にある様々な表現を集めその効果などについて考えたり、生徒の表現活動について自己評価や相互評価を行ったりすること。 |

これらの活動は、いずれも総合的な学習の時間における生徒の学習活動に密接にかかわる内容である。例えば、ウは、校外の人々への協力依頼や協力への感謝を表す文章の作成に大きく寄与することになる。また、エの活動を積み重ねることによって、生徒は自分の文章を見直す力が身に付くであろう。

家庭総合の大項目(2)「子どもの発達と保育・福祉」について、新要領では、「幼稚園や保育所等の乳幼児、近隣の小学校の低学年の児童等との触れ合いや交流の機会をもつよう努めること」(文献[1]引用)とされている。この触れ合いや交流学習がきっかけとなり、総合的な学習の時間を利用して、更に保育体験をやってみたいという生徒が現れる可能性は高い。また、そのような生徒の総合的な学習の時間における学習経験は、家庭総合の授業においても生かされるであろう。

4.4.2 総合的な学習の時間と特別活動のかかわりについて

新要領によれば、特別活動の特質は「望ましい集団活動を通して」(文献[1]引用)、学校生活の上で必要な事柄をなすことによって学ぶということである。生徒は、学校の中で様々な規模の集団に所属し、集団活動や体験的な活動を行う。それらを通して、互いに人格を尊重し合い、それぞれの個性を伸ばさせることで、望ましい人間関係を築く。そして生徒一人一人の全人的な人間形成を図るとともに、集団自体の改善向上を図ることを目指しているのである。

この点を、先に4.1で示した総合的な学習の時間創設の観点と比較してみよう。総合的な学習の時間では、生徒一人一人の個性を生かすという視点に立って、生徒個人の問題意識から出発し、生徒が自ら学び自ら考える学習活動が求められている。つまり、特別活動と総合的な学習の時間は、それぞれの出発点及び活動形態を異にしていると言わざるを得ない。

他方で、新要領解説では、特別活動と総合的な学習の時間の「相互補完的で、相互還流的な関係の在り方」(文献[2]引用)が示唆されている。学校生活における諸課題の解決という自主的、実践的態度の育成、人間としての在り方生き方についての自覚、コミュニケーション能力の育成、学ぶことの意義の理解、就業体験やボランティア活動などの体験的な活動の重視、家庭や地域の人々との連携など、特別活動の内容や配慮事項には、総合的な学習の時間のねらいと重なる部分が非常に多い。そして何よりも、両者はともに各学校の創意工夫をよく発揮できる活動である。したがって、各学校が特色ある学校づくりを進める上で、教科指導を中心に、特別活動と総合的な学習の時間を、それぞれの特質を踏まえて、車の両輪のようにバランスよく展開させることが必要である。例えば、生徒が一年次に総合的な学習の時間で行ったグループ学習や校外調査活動などを通して培った能力を生かして、二年次に文化祭や修学旅行の自主研修などを、生徒が主体的、意欲的に計画し実施することによって、より充実した修学旅行や文化祭をつくり上げるといった取組がなされてよいだろう。

4.5 高校における総合的な学習の時間の基本的なとらえ方

4.5.1 教育課程における位置付けについて

4.4に示したように、新要領では、生徒の主体的な学びや、課題を追究して解決すること、体験を重視すること、コンピュータなどの情報機器を活用した学習活動が、総合的な学習の時間のみならず、各教科において求められている。生徒は学校の教育活動全般を通して、課題解決的、体験的な学習活動に親しむことになる。ただし、それらの学習活動は、あくまで各教科・領域のねらい・目標の

実現のためである。総合的な学習の時間は、新要領に謳われた理念を最も明瞭に表す学習活動であるが、決して唯一の学習活動ではない。むしろ、各教科での十分な学習があつてこそ、生徒の主体的な学習活動が生きてくるはずである。また高校では、卒業後の進路や資格取得を考えると、新要領実施後も、教科指導の時間を大幅に削減することは困難である。総合的な学習の時間を矮小化させてはいけませんが、あれもこれもと詰め込んで、肥大化させることも避けなければならない。したがって、普段は各教科ごとに規定された学習を行う生徒に、できるだけ制約を取り払い、自由な発想での主体的な学習活動を、最小限の時間で保障するのが、高校における総合的な学習の時間と言えるだろう。

4.5.2 子どもの発達段階とのかかわりについて

一般的に、子どもは高校生の段階になると、身体的変化が安定してくるとともに、自己が何者であるかを少しずつ客観的にとらえることができるようになる。また、これまで絶対的に依存してきた親から離れ、自らの行動を自ら決定したいという独立の欲求が高まってくる時期でもあり、友人や異性などとこれまで以上に広い範囲で新たな人間関係を築くようになる。そうして、自己の周りの社会を、自己を生かす場あるいは「自分の力で変えるべき物」(文献[5]引用)として意識するようになる。

しかし、子どもは知識や経験が不足しているため、社会の中で自己をどのように位置付け、どのように自己を生かすことができるのかについて、明確な見通しをもつことができない。したがって、高校における総合的な学習の時間では、いかにして自己の能力を社会の中で生かすことができるか、あるいは、どのようにして自分が興味・関心をもつ事柄を社会とかがかわらせることができるかを模索するために、より能動的、主体的に社会とのかかわりを体験できる学習活動が望まれる。

4.5.3 学習課題の設定について

先に4.2で示したように、小・中学校では、児童生徒の興味・関心にある程度の方向性をもたせる共通テーマや複数の単元を設定し、その下で児童生徒に学習課題を設定させていることが多い。しかし、ここでもう一度、先に4.1で示した総合的な学習の時間創設の観点を振り返ってみたい。総合的な学習の時間には、生徒一人一人の個性を生かす学習内容と、児童生徒が自ら課題を見付け、自ら学び自ら考え、主体的に判断する学習活動が求められている。したがって、高校における総合的な学習の時間では、学習課題の設定について、小・中学校と異なるアプローチがあつてよいと考える。

総合的な学習の時間は、それぞれの学校において完結する学習活動ではない。京都ノートルダム女子大学教授の加藤明氏によれば、新要領に掲げられた総合的な学習の時間のねらいとは、小学校三年から高校卒業までの約十年間にわたる学習活動を通して、児童生徒に身に付けさせたいことなのである(文献[10]参照)。小・中学校における様々な学習活動を通して身に付けた知識・能力を、高校における総合的な学習の時間を通して、更に発展させることが望まれる。小・中学校において、全校又は学年の共通テーマの下で学習活動に取り組んできた子どもが、成長とともに一人一人異なる問題意識をもつようになるのは極めて自然な状態である。したがって、高校における総合的な学習の時間では、十年間の総合的な学習の時間の最終段階として、できる限り生徒一人一人の問題意識から出発した学習活動を展開するように努めることが求められると考える。その経験が、高校卒業後に高等教育機関で本格的な学問研究に従事する際に、また社会人として日常の仕事に従事する際に、様々な場面で問題意識をもち、自ら課題を見だし、その解決に向けた道筋を自らたどる力となるのである。

4.5.4 教師による指導・援助の在り方について

確かに、総合的な学習の時間は、生徒一人一人の問題意識から出発することが前提であるとしても、決して生徒の個人的な時間ではない。あくまでも学校を通して行われる教育活動である。したがって、生徒は、自分がその時間を使って、いつ、どこで、何を、何のために、どのように学習するのかを、教師や他の生徒に説明する責任を有する。例えば、保育施設訪問・体験を希望する生徒には、単にやってみただけではなく、そうすることが自分や他の生徒、そして社会にとって、どのような意味をもつのか、なぜその方法でなければならないのかを考え、表現させたい。生徒にそこまで考えさせるには、教師の指導・援助が不可欠であろう。教師は生徒の希望を受け入れるだけでなく、彼らに立ち止まって、自分の考えや行動を見直すように、常に働き掛ける必要がある。

学習内容や方法については、生徒の主体性を十分に尊重したい。現実的には、学校の施設・設備、活動時間、必要経費などの制約から、実現が不可能な場合もある。しかし、それを理由として、生徒が安易に学習活動を断念したり、学習内容を変更するのでは意味がない。生徒にとって、追究活動がいかに困難であるかを実感することは大切な経験である。それでもなお、自分のやりたいことを少しでも推進する上で、一体自分にはどのようなことができるのかを、生徒自身が考え、創意工夫を行うようにするには、やはり教師の指導・援助が不可欠である。

4.5.5 総合的な学習の時間と進路指導のかかわりについて

全国の高校における総合的な学習の時間の実践で、最も多く見られる事例が、「キャリア教育」あるいは「進路学習」と呼ばれる活動である。これは、従来ホームルーム活動で行われてきた進路指導を応用・発展させた学習活動であり、「産業社会と人間」にも共通する部分が多い。

従来行われてきた進路指導の基本方針は、生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択できるように計画的、組織的な指導を行うことである。具体的には、卒業後の進学や就職に向けて、生徒が自己を理解し、職業を理解し、職場や上級学校を理解し、進路の適切な選択を行う能力を伸ばすように指導している(図11参照)。特に、将来の選択のために必要な知識や情報を獲得させることで、現在の生徒自身に不足しているものを認識させ、以後の教科学習の動機付けとするための指導に、多くの時間が費やされてきたように思われる。

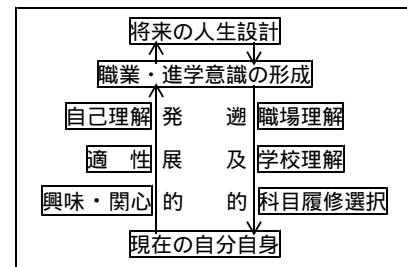


図11 進路指導の流れ

しかし、こうした教師主導による「適性的」な指導に対して、生徒が主体的に行う「発展的」な活動が求められていると考える。すなわち、生徒が現時点でもつ興味・関心や知識・技能を発揮し、具体的な活動を試行錯誤することを通して、自らを見つめ直すことによって、職業・進学意識の形成を刺激し、将来の人生設計を考える視座を確認する機会を、生徒に繰り返し与える進路指導である。そのような生徒の活動を保障するものとして、総合的な学習の時間をとらえることができる。「課題研究」が「その特殊性において、初めから進路指導ないし進路選択と密接にかかわっていた」(文献[11]引用)と同様に、教師は、生徒に対する進路指導の意識をもって、総合的な学習の時間における指導に当たることが必要となる。ただし、教師がもつ進路指導の意識を前面に押し出して指導するのではない。仮に、総合的な学習の時間をヨットの航行に例えれば、出港地は現時点における生徒自身の姿であり、生徒の興味・関心を方向舵とした学習活動が前提である。教師がもつ進路指導の意識は、いわば水面下であってヨットの航行を安定させるパラストキール(重錘)のような存在であることが望ましい。このように、総合的な学習の時間とホームルーム活動という方向性の異なる教育活動を同時に展開することによって、学校教育における複線的な進路指導がより一層充実すると思われる。

4.5.6 評価の在り方について

従来の教科指導における評価を振り返ってみると、考查点などの学習成果を示す数値に、生徒の日常における学習への取組などを平常点として加味し、総合的な評価が行われている。考查点と平常点の割合は、学校や教科で異なるが、おおむね8:2~5:5程度であろう。

総合的な学習の時間では、その発想を逆転させる必要があると考える。すなわち、生徒の学習に対する関心・意欲・態度や進歩の状況など、従来の教科指導であれば平常点として扱われてきた部分の割合を大幅に増やす。そして、生徒の学習過程を重視した形成的評価を導入する。形成的評価の根拠として、生徒自身の自己評価や生徒同士による相互評価を活用することなどが考えられる。そこで、生徒の評価力を伸ばすためには、教師が簡潔な文章でまとめた明確な評価基準をあらかじめ生徒に提示したり、各教科・領域で意図的、計画的に、自己評価や相互評価の機会を増やすことが必要となる。

例えば、国語の作文、地歴・公民科の調査、理科の実験、体育の実技、芸術の演奏・制作、英語のロールプレイ、家庭科の製作・調理など、各教科の学習活動の中でも生徒の主体的活動の比率が高くなる場面において、できるだけ頻回に自己評価や相互評価を導入することで、生徒に評価という行為

そのものを理解させ、親しませることができるであろう。しかし、教科によっては、自己評価や相互評価の実施がどうしても単発的になってしまうことがある。その点では、年間を通した特別活動に自己評価や相互評価を導入することがより有効的であると考える(文献[2]参照)。評価するという行為によって、生徒自身が各時間の活動への意義を深めたり、以後の活動への見通しをもつようになる。さらに、評価を積み重ねることによって、生徒は長期的に自らの変容の様子を把握することができる。教師は、系統的に生徒の変化をとらえることで、生徒への理解が深まることが期待される。

また、多くの小・中学校では、児童生徒が自らの学習過程を評価する方法として、ポートフォリオ評価を導入している。レポート、自己評価カード、作品など主要な学習の成果を一か所に集約させるポートフォリオは、生徒の学習過程を振り返るのに便利である。ただし、ポートフォリオは、基本的に生徒の手元に置かれている。そこで、教師が保管する資料として、ポートフォリオとは別に、「医者が作成するカルテのようなもの」(文献[12]引用)を作成しておくことよい。このカルテを他の教師や校外協力者に回覧して、生徒の活動状況を報告したり、指導の方針などを記入しておくこともできる。

「 」のポートフォリオ個人カルテ 組 番 名 前		
月日	内 容	サイン

図12 ポートフォリオ個人カルテ
(広島県立教育センター研究紀要第27号別冊より引用)

5 高校における総合的な学習の時間の具体案

5.1 総合的な学習の時間を組み込んだ教育課程案

ここでは、本校の平成13年度時間割を基に、週一回7時限目を設定し、教科学習30単位時間、ホームルーム活動1単位時間の週合計31単位時間を前提として、総合的な学習の時間を組み込んだ教育課程案、A案・B案を次ページに提示した。二案の編成上の主要なポイントは、下の通りである。

A 案		B 案
<ul style="list-style-type: none"> ・芸術科目の選択履修を除いて、全員同じ科目を履修する ・理科は、理科総合Aと化学 を履修する ・家庭科は、全員が家庭基礎を履修する 	一年次	<ul style="list-style-type: none"> ・芸術科目の選択履修を除いて、全員同じ科目を履修する ・理科は、理科総合Bと生物 を履修する (ただし、生物 は1単位減の2単位での履修)
<ul style="list-style-type: none"> ・全員が古典講読、地歴B科目、数学Bを同じ単位数で履修するなど、幅広い教養を身に付ける ・地歴B科目と理科 科目は各一科目選択 	二年次	<ul style="list-style-type: none"> ・文系では、地歴科目を二科目選択履修する ・理系では、理科 科目を二分野選択履修し、一・二年次で合計して、科目を三分野履修する ・家庭科は、文系が家庭総合、理系が家庭基礎
<ul style="list-style-type: none"> ・地歴公民科は、二科目の選択履修が可能 ・数学と英語、理科と芸術から選択可能 ・看護医療系、食物系希望者に対応するため、生物 の選択履修を可能にする 	三年次 文系	<ul style="list-style-type: none"> ・地歴公民科は、一科目の選択履修 ・数学と古典講読、理科と英語から選択可能 ・家庭総合を継続履修 ・選択群を置き、幅広い進路希望に対応する
<ul style="list-style-type: none"> ・地歴公民科は、二科目の選択履修が可能 ・理科は、科目+科目で一分野、又は科目で二分野を選択履修が可能 	三年次 理系	<ul style="list-style-type: none"> ・地歴科は、一科目の選択履修 ・数学は、数学 と数学 , 数学Cと数学Bからそれぞれ選択履修が可能 ・理科 科目は、二分野を選択履修
<ul style="list-style-type: none"> ・一～三年次で各1単位の実施 	総合的な学習	<ul style="list-style-type: none"> ・一年次で2単位、三年次で1単位の実施
総合的な学習の時間は、最低限の3単位で設定。A案では、3.2.1のアンケート調査結果において、総合的な学習の時間の学年配当として、各学年に1単位ずつという回答がもっとも多いことを考慮した。	備 考	B案では、二年次にあえて総合的な学習の時間を設定しない。4.4.2で示したように、一年次での総合的な学習の時間の学習経験を生かして、文化祭や修学旅行など二年生が中心となる学校行事などに主体的に取り組ませたいからである。

高等学校普通科における総合的な学習の時間の構想に関する一考察

単 位	一年次	二年次			三年次													
	共通履修	共通履修			文系類型		理系類型											
1	国語総合	現代文			現代文 *		現代文 *											
2		古典講読 *			古典		日史A 地理A											
3							世史A 政経											
4	現代社会	世史B	日史B	地B	世B	日B	地B	生*										
5	数学								数学 *									
6	数学A	数学			世A*		日A*		地A*		政経*		数学C *					
7	理科総合A				数*		数*		英*		物*		化		生*			
8	化学	数学B			化		生		音		美		物		化		生	
9	体育	物理 生物			化*		生*		音*		美*		物*		化*		生*	
10	保健	体育			化*		生*		音*		美*		物*		化*		生*	
11	美術 音楽				物*		化*		生*		物*		化*		生*			
12	英語	保健			体育				体育									
13	英語	英語			リディング				リディング									
14	オーラルコミュニケーション				リディング				リディング									
15	家庭基礎	ライティング			ライティング *				ライティング *									
16	情報A	情報A			ライティング *				ライティング *									
17	総合的な学習	総合的な学習			総合的な学習				総合的な学習									
18	LHR	LHR			LHR				LHR									

教育課程A案

丸数字は単位数を示す

*印は標準単位数より増単を示す

単 位	一年次	二年次		三年次									
	共通履修	文系類型	理系類型	文系類型		理系類型							
1	国語総合	現代文		現代文 *		現代文 *							
2		古典		古典講読		古典 *		世B 日B 地B					
3				世A 日A 地A									
4	現代社会	世史A *		世B 日B 地B		数学 *		数学 *					
5	数学	数学											
6	数学A	日A* 地A*		世B 日B 地B		政経*		数学C *					
7	理科総合B	数学		数*		数B*		古講*		数学C *		数学B *	
8	生物			化学		化*		生*		物		化学	
9	体育	化学		物 地		体育				物 生 地			
10	保健	体育		物 地		リディング				体育			
11	音楽 美術			体育		リディング				リディング			
12	英語	保健		リディング				リディング					
13	英語	英語		ライティング				ライティング *					
14	オーラル			家庭総合				ライティング *					
15	情報A	ライティング		ライティング		選択群 化学 生物 芸 英 簿記 児童文化				ライティング *			
16	総合的な学習	家庭総合		家庭基礎		総合的な学習				総合的な学習			
17	LHR	LHR		LHR		LHR				LHR			

教育課程B案

印は標準単位数より減単を示す

高等学校普通科における総合的な学習の時間の構想に関する一考察

5.2 総合的な学習の時間と各教科・領域を関連させた年間教育計画例（一年次）

以下の表は、5.1の教育課程A案に基づいて、総合的な学習の時間と各教科・領域とのかかわりを示したものである(一部省略)。なお、表中上段は、新要領における各教科・領域の内容を示しており、下段は、総合的な学習の時間との関連として、考えられる学習活動を示している。各学校でこのような関連表を作成することを通して、各教科の担当教師が、教科の枠を超えて、同一の視点で系統

科目	4月	5月	6月	7月	8月	9月
	前期					
総合的な学習	事前指導での説明 ・ 『総合ニュース』などの配布					
情報A	(1)情報を活用するための工夫と情報機器 問題解決の手段としてのコンピュータの活用方法を学ぶ			(2)情報の収集・発信と情報機器の活用 情報の効果的な検索・収集の方法を学ぶ		
現代社会	(1)現代に生きる私たちの課題 中学時代の総合的な学習の時間の成果を活用する			(2)現代の社会と人間としての在り方生き方 ア現代の社会生活と青年 今日の課題についての基礎的知識や資料収集、活用など学ぶ方を学習する		
国語総合	A話すこと 課題意識をもち、的確に聞き取り、相互に話し合い、課題解決を図る学習をする			B書くこと 夏休みの自由課題作文		
数学	(1)方程式と不等式 ア数と式 イ一次不等式 ウ二次方程式 水道料金や落下実験など身近な日常生活で経験できる事柄から、一次関数・二次関数的な現象を実験的・体験的に学習する			(2)二次関数 ア二次関数とそのグラフ		
数学A	(1)平面図形 ア三角形の性質 イ円の性質 校舎の高さの測定などを通して日常生活に潜む図形の意味や働きに気付く			(2)集合と論理 ア集合と要素の個数 論理的な思考プロセスを身に付ける		
理科総合A	(1)自然の探究 ア自然の見方 イ探究の方法 身近な自然の事物・現象を事例に観察、実験の方法を学ぶ			(2)資源・環境と人間生活 ア資源の開発と利用 イいろいろなエネルギー エネルギー問題について身近な課題を探り上げて学習する		
化学	(1)物質の構成 ア物質と人間生活 イ物質の構成粒子 ウ探究活動 化学の成果と人間の生活とのかかわりに触れる			(2)物質の種類と性質 観察実験を通して、仮説設定、計画立案、検証方法などを学ぶ		
体育	A体づくり運動		B器械運動		C陸上競技	
保健	(1)現代社会と健康 生活習慣や喫煙・飲酒などについて地域の人々へのアンケート調査を実施する			(2)生涯を通じる健康 介護保険制度や臓器移植制度などについて		
音楽	A表現 (1)歌唱 歌唱曲のイメージについて討論したり、自分なりの方法で表現する			(2)器楽 様々な国の楽器を比較して、異文化理解を深める		
美術	A表現 (1)絵画・彫刻 自分の思いや願いを表現するために、線・色・形などを用い、試行錯誤することで、自己を確認していく			(2)デザイン		
英語	ア英語を聞いて、(中略)概要や要点をとらえたりする 教材を通して異文化理解や国際理解を深める			イ英語を読んで、(中略)概要や要点をとらえたりする 日本語との比較を通して言語学的な興味・関心を伸ばす		
家庭基礎	(1)人の一生と家族：福祉 乳幼児、高齢者との触れ合い・交流など体験的な学習をする			(4)ホームプロジェクト (2)家族の生活と健康 生活の中から課題を見だし、解決方法を考え、計画を立て実践		
ホームルーム活動	学校適応指導 集団での関係づくり		職業：適性 職業に目を向け、社会人への自覚を促す		科目選択指導 三者面談 将来への見通しを模索する 協力して「ものづくり」	
学校行事	入学式：対面式 集団意識の形成		学級活動の日：遠足 学級単位での施設訪問など体験学習		昇給体：定期考査 球技大会 水泳大会 文化祭 定期考査 夏休み中の校外活動・体験学習	

高等学校普通科における総合的な学習の時間の構想に関する一考察

的に、生徒を指導することがより一層可能になると思われる。なお、この例では、一年次の前期で情報Aを、後期で総合的な学習の時間を、それぞれ週2時限ずつ集中実施することを前提としている。また、表中の 印は、生徒自身による自己評価を、 印は生徒同士による相互評価の実施の可能性を示したものである。生徒が評価を行う機会をできるだけ多く設けることによって、生徒の評価力を向上させることを目的としている。

10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
後期						
導入・課題設定	課題追究	中間発表会		まとめ	発表会	後期のみ実施する
						前期のみ実施する
イ現代の経済社会と経済活動の在り方 _ウ現代の民主政治と民主社会の倫理_ _工国際社会の動向と日本の果たすべき役割_ _						
C読むこと [言語事項] 作者の意図に共感したり、疑問をもつことで、思考力を育てる 目的や場にふさわしい話し方や言葉遣いを身に付ける						
イ二次関数の値の変化 _ (3)図形と計量_ _ア三角比_ _イ三角比と図形_ 校舎の高さを測量するなどの作業的学習をする						
イ命題と証明 _ (3)場合の数と確率_ _ア順列・組合せ_ _イ確率とその基本的な法則_ _ウ独立な試行と確率_ _ ジャンケンやサイコロなど身近で具体的な事例で確率や統計的处理を学ぶ						
(3)物質と人間生活 _ア物質の構成と変化_ _イ物質の利用_ _ (4)科学技術の進歩と人間生活_ _ 興味・関心に応じて課題を追究し、報告書にまとめたり、発表を行う						
ア無機物質 _イ有機化合物_ _ウ探究活動_ _ (3)物質の変化_ _ア化学反応_ _イ探究活動_ _ 仮説設定、実験計画、実験による検証、実験データの分析・解釈などの探究方法を学び、報告書作成や発表を行う						
E球技 _F武道_ _Gダンス_ _H体育理論_ _ (B-F又はGから3又は4領域選択)_ _ 自分の課題を克服することで達成感・成就感を味わう 体を動かすことで、自分の思いや願いを表現してみる						全体を通して
_ (3)社会生活と健康_ _ 自ら問題を発見し、課題解決的な学習を行う ストレス解消法などを自ら工夫してみる						
(3)創作 B鑑賞_ 自分の思いや願いを表現するために、声や音を使い、自分なりに工夫する 作品や作者について自ら調べ、発表し合う						
(3)映像メディア表現 B鑑賞_ 自分が制作した情報を発信し、共有する 作者の考え方や生き方などを調査・討論し、自己の考え方や生き方を自覚する						常に自己の内面を確認
ウ(中略)・・・話し合ったり意見を交換する _工(中略)・・・整理して書く_ _ 具体的な言語使用場面を採り上げ、体験的な学習を行う 話し手・聞き手である他者を思いやる気持ちを伸ばす						
_ (3)消費生活と環境_ _ 日頃の何気ない消費生活を多角的・多面的に考える						(4)は夏休み中に実施
進路指導 _科目選択指導_ _ボランティア活動_ _ 自己を見つめ、将来の進路選択の準備をする 社会と自己とのかかわりを考え直す						
マラソン大会 _定期考査_ _柔道大会・スナニ教室_ _定期考査_ _卒業式・終業式_ _ 冬休み中の校外活動・体験学習 春休み中の校外活動・体験学習						全体を通して

5.3 総合的な学習の時間の活動展開例

ここでは、以下の方針に基づいて、一つの活動展開例を試作してみた。

- (1) 基本方針：各教科・領域との連携を積極的に図り、全教職員の協力体制の下で指導する。
- (2) 事前指導：ホームルーム活動や公民科の授業で、中学時代の学習成果などを生徒に紹介させる。
『総合ニュース』などを配布し、生徒の学習への意欲・関心を高めるとともに、活動の目安とする。
- (3) 導入段階：生徒が題材を探すための、様々な指導を試みる(具体例は、5.4を参照)。
- (4) 課題設定時：生徒個人の興味・関心から学習課題を設定させ、発表会を実施する。生徒に説明責任を果たさせるとともに、今後の学習活動の意欲喚起につなげる。また、他の生徒の発表に対して、自分の知識や経験からアドバイスを与える時間を設定し、生徒に一体感をもたせるようにする。
- (5) 活動形態：同じような学習課題をもつ生徒4～6名程度を一つの班に編制し、班ごとに担当教師が指導する。学習活動は、原則として生徒個人で行わせるが、班単位での活動も認める。
- (6) 事後指導：報告書を作成し、保護者、校外協力者、公共機関、小・中学校へ生徒に持参させる。

段階	生徒の活動内容	教師の指導上の留意事項	時数	形態	指導	企画	主な評価の観点	評価主体		
								自	相	外
導入	・オリエンテーション ・題材を探す	活動の概要を理解させる 興味・関心を喚起する活動	1	級	H	委	関、理、評 関、発、評			
			2	年	年	年				
課題設定	・発想を広げる ・学習課題を決める ・学習方法を決める ・学習計画を立てる ・学習課題を発表する	様々な発想法を活用させる 設定理由を記述させる 多様な方法を考えさせる 大まかな計画にとどめさせる 一件5分程度、情報交換あり	1	級	H	委	発、活、判 発、判、表 収、活、判 活、企、判 表、理、評			
			1	級	H	委				
			1	班	S	委				
			1	個	S	委				
			3	級	H	年				
課題追究	・課題を追究する ・課題を追究する ・課題を追究する ・課題を追究する ・課題を追究する ・中間報告をする	必要に応じて、協力者を探す 候補者を複数挙げさせておく 文書、事前予約などに注意 協力者の都合で日程の変更や 活動時間の延長もあり得る 一件5分程度、情報交換あり	1	班	S	委	実、対、創 実、対、創 実、対、創 実、対、創 実、対、創 表、理、評			
			1	班	S	委				
			2	個	S	委				
			2	個	S	委				
			2	個	S	委				
			3	級	H	年				
課題追究	・学習活動を振り返る ・学習計画を見直す ・課題を追究する ・課題を追究する ・課題を追究する ・課題を追究する	学習課題の変更も認める 発表を見据えた計画づくり 必要に応じて、教師同士での 情報交換を行う機会を設け、 指導上の問題点や工夫改善の 方法などを検討する	1	班	S	委	活、評、判 活、企、判 実、対、創 実、対、創 実、対、創 実、対、創			
			1	個	S	委				
			2	個	S	委				
			2	個	S	委				
			2	個	S	委				
			2	個	S	委				
まとめ	・学習活動を振り返る ・学習活動をまとめる ・学習成果を発表する ・学習成果を公表する	活動の意義を再検討させる 最終発表に向けて準備させる 一件5分程度、感想交換あり 一件10分程度、感想交換あり	1	班	S	委	活、判、評 判、創、表 表、理、評 表、理、評			
			1	個	S	委				
			3	級	H	年				
			3	年	年	年				

【凡例】級=ホームルームごと，班=班ごと，個=個人又は班ごと，年=学年全体，H=ホームルーム担任教師，S=総合的な学習の時間の各担当教師，委=総合的な学習の時間推進委員会(5.7を参照)，関=興味・関心，理=理解力，評=評価力，発=問題発見能力，判=判断力，表=表現力，収=情報収集力，活=情報活用力，企=企画力，実=実行力，対=対人関係力，創=創造力，自=生徒自身による自己評価，相=生徒同士による相互評価，外=外部協力者による評価，=必ず実施する，=実施することも可能である

5.4 導入段階における題材探しのための指導例

5.4.1 全教職員による模擬発表会の実施

総合的な学習の時間の自己研修を兼ねて、全教職員が興味・関心のある事象について課題を設定し、調査・研究を行ってみる。その結果を生徒に対して発表する。これには、次の三つのねらいがある。

- (1) 全教職員が総合的な学習の時間の学習活動の進め方を実際に体験し、今後の指導の参考にする。
- (2) 模擬発表会を見ることで、生徒に総合的な学習の時間の全体的なイメージをもたせる。
- (3) 生徒が教師を理解することを助ける。

【実施要領】

実施形態：学年全体，2時限連続，分科会形式

事前準備：生徒の参加希望を調査し，会場案内・題目リスト・参加生徒名簿を作成する。

発表者(教師)は，レジュメ・資料などを作成しておく(B 4 一枚，両面も可)

展開例：朝の S H R で教師が実施要領を説明し，会場案内・題目リスト・評価用紙を配付する。

13:20～ 生徒移動(10分)……筆記用具と評価用紙3枚を持参させる。

13:30～13:50 一回目発表……第一希望の発表を聞き，評価用紙に記入させる。

14:00～14:20 二回目発表……第二希望の発表を聞き，評価用紙に記入させる。

14:30～14:50 三回目発表……第三希望の発表を聞き，評価用紙に記入させる。

15:00～ 振り返り(10分)……ホームルームで発表を振り返り，記録をまとさせる。

5.4.2 各教科による学習課題案の例示

各教科の教師が，総合的な学習の時間において，生徒が取り組むことができると思われる学習課題をあらかじめ作成し，それを一覧表にして生徒に提示する。これには，次の三つのねらいがある。

- (1) 教科との関連で総合的な学習の時間をとらえることで，教師の専門性を発揮しやすくする。
- (2) 生徒が教科学習で習得した知識・技術と総合的な学習の時間とのかかわりを理解しやすくする。
- (3) 生徒が総合的な学習の時間で行った学習活動が，各教科の学習過程で活用されるようにする。

【実施要領】

実施形態：ホームルームごと，2時限連続，グループ形式

事前準備：各教科に生徒の履修状況を参考に，学習課題案を作成してもらい，一覧表にする。

展開例：ホームルーム内で生徒を4～6名程度の小グループに編制する。

小グループごとに学習課題案一覧表を配付し，生徒一人一人に課題案を検討させる。

自分の推薦課題を一つ選ばせ，その理由を考えさせる。

小グループ内で，互いに推薦課題を発表させ，意見交換を行わせる。

小グループごとに，ホームルーム全体へ自分たちの推薦課題を発表させる。

5.4.3 大学入試・就職試験などにおける小論文・作文題目の活用

過去に大学入試や就職試験などで出題された小論文や作文の題目を一覧表にし，その中から生徒に興味・関心をもった題目を選ばせ，小論文や作文を書かせる。これには，次の四つのねらいがある。

- (1) 教師は，これまでの進路指導で蓄積してきた資料を活用して準備ができる。
- (2) 総合的な学習の時間の学習課題だけでなく，生徒に将来の進路を考える直接のきっかけとさせる。
- (3) 生徒が題目に基づいて学習課題を設定し，それに関する調査や体験を行うことにより，その後で再び小論文や作文を書くときに，生徒は実感を伴って文章を書くことができる。
- (4) 生徒は，大学入試や就職試験などの小論文や作文に自信をもって臨むことができる。

【実施要項】

実施形態：ホームルームごと，2時限連続，個別形式

事前準備：過去に出題された小論文や作文の題目から適切なものを選び，一覧表にする。

展開例：生徒に小論文・作文の題目一覧表を配付する。

生徒一人一人に，自分が興味・関心をもった題目を一つ選択させる。

選択した題目について，実際に小論文を書かせる。

高等学校普通科における総合的な学習の時間の構想に関する一考察

選択した題目，選択した理由，小論文の要旨を，一人2分程度で発表させる。
小論文を書いてみて，実際に体験してみたいことやその方法を考えさせる。

5.5 具体的な学習活動の展開例

5.5.1 社会調査やコンピュータを活用した学習活動の展開例

	生徒の学習活動	教師の指導・援助
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・題材探し：教職員による模擬発表会に出席 	<ul style="list-style-type: none"> ・公民科教師の発表「最近の日本の政治について」
設定	<ul style="list-style-type: none"> ・発想を広げる：国会議員の選挙制度に関心をもつ ・資料や情報の収集：図書館，インターネット，身近な人々 ・学習計画の立案：方法，日程，校外協力者など ・学習課題の発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・政治から連想されることを発想させる ・活動場所(図書室，コンピュータ室など)の調整，調査方法の指導，教科教師との連絡など ・生徒同士による相互評価，意見交換
追究	<ul style="list-style-type: none"> ・校外での調査活動：選挙管理委員会，新聞社，放送局などを訪ねて，選挙の実態をできるだけ詳しく調べる ・Web上でのアンケート調査を実施する 調査内容：政治・選挙への関心，選挙制度への理解など ・中間発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・外部機関との交渉のための生徒指導 ・外部機関への正式の協力依頼文書の準備 ・学校ホームページの利用を交渉，校外への協力依頼 ・生徒同士による相互評価，意見交換
追究	<ul style="list-style-type: none"> ・学習計画の見直し：自分の考えを検証したい！ ・校内で全生徒・教職員による模擬投票を企画・実施し，選挙制度の違いがどれだけ結果に反映するのを探る ・Web上の調査結果や模擬投票結果のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ・調査方法などの助言 ・校内での協力を要請する ・コンピュータなどの利用援助 ・表現方法の助言
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・発表に向けた準備 ・学習成果発表会 ・学習活動の整理，振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動場所，利用機器などの調整 ・生徒同士による相互評価，意見交換 ・学習活動全体を反省させ，次年度以降に生かす

個人カルテへの記入例

自評 = 生徒自身による自己評価

個人カルテ No. 1			
1年F組3番生徒氏名：北上 太郎		総合担当教師：栗駒 花子	
月日	内容	自評	サイン
4/24	学習課題の決定：「選挙制度について調べる」		北
5/1	設定理由：最近の国会議員選挙をみていると，一度落選した候補者が別の形で当選したりして，複雑で分かりにくい。本当に分かりやすく，国民の意見を反映できる選挙制度とはどういうものかを知りたい。		北
5/8	活動概要：Web上でアンケート調査を実施したり，コンピュータを使ってシミュレーションをやってみて これからの日本社会にぴったりの理想的な選挙制度をつくってみる！		北
5/8	伸ばしてほしい能力：選挙という事柄を扱うことで，社会人としての義務や責任感を自覚する 多くの人々とかかわることで，コミュニケーション能力を身に付ける 様々な意見を参考にして，多角的な視点から物事を判断する能力を身に付ける		栗

指導要録への記入例

生徒氏名	北上 太郎
総合的な学習の時間の記録	
学習活動	一年次：国会議員選挙に着目し，アンケート調査やシミュレーションなどを通して，理想的な選挙制度を追究した。 (個人カルテの「活動概要」などを参考にして，記述している)
評価	一年次：多くの人々とかわりながらWeb上のアンケート調査を行い，自分の考えを検証するために全校模擬投票を提案して実施するなど，コミュニケーション能力や企画力を伸ばすことができた。 (個人カルテの「伸ばしてほしい能力」などを参考にして，記述している)

高等学校普通科における総合的な学習の時間の構想に関する一考察

5.5.2 教科学習から発展し、多くの教師とかかわりながら行う学習活動の展開例

	生徒の学習活動	教師の指導・援助
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・題材探し：生物の授業に興味を示す 	<ul style="list-style-type: none"> ・理科教師による指導・援助
設定	<ul style="list-style-type: none"> ・発想を広げる：身近にある植物に着目する ・資料や情報の収集：図書館、インターネット、身近な人々 ・学習計画の立案：方法、日程、校外協力者など ・学習課題の発表「学校の近くの植物について」 	<ul style="list-style-type: none"> ・植物から連想されることを発想させる ・活動場所(図書室、コンピュータ室など)の調整、調査方法の指導、教科教師との連絡など ・生徒同士による相互評価、意見交換
追究	<ul style="list-style-type: none"> ・校外での調査活動：学校周辺の植物の葉や実を集めたり、写真に撮ってまとめる ・植物の名前を詳しく調べる：俗称、正式名称、学術名 ・中間発表「植物の名前について」 	<ul style="list-style-type: none"> ・理科教師による指導・援助 ・情報科教師による指導・援助 ・国語科及び英語科教師の指導・援助 ・生徒同士による相互評価、意見交換
追究	<ul style="list-style-type: none"> ・学習計画の見直し：植物と人間の生活の关系到絞る ・地域の高齢者や専門家などにインタビューして、植物の実を使った玩具作りを教わる ・自分が体験したことを、誰かに伝えたい！ ・保育所の遠足に同行し、植物の種類や木の実玩具を教える 	<ul style="list-style-type: none"> ・総合の担当教師の変更 ・社会科教師の指導・援助 ・積極的に校外学習活動をさせるように指導する ・家庭科教師の指導・援助
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・発表に向けた準備 ・学習成果発表会「植物と人間の生活との関係について」 ・学習活動の整理、振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動場所、利用機器などの調整 ・生徒同士による相互評価、意見交換 ・学習活動全体を反省させ、次年度以降に生かす

個人カルテへの記入例

個人カルテ No. 2		総合担当教師：船形 清志	
月日	内 容	自評	サシ
7/10	学習課題の変更：「植物の名前について調べる」 変更理由：同じ植物なのに、地区や国によって付けている名前が全然違うことが分かりました。どうしてそんなに違う名前を付けたのかを知りたいから。		広
7/10	名前には、それを付けた人々の思いが込められているはずです。語学関係の先生に相談してみよう。		船
8/28	学習課題の変更：「植物と人間の生活との関係について」 変更理由：植物の名前を調べて、名前を付けた人たちの生活と深いかかわりがあることに気付いたから。		広
8/28	インタビューした地域以外の人や社会科の先生からも、幅広くいろいろな話を聞いてみよう。		船

5.5.3 小論文作成と体験活動を組み合わせた学習活動の展開例

	生徒の学習活動	教師の指導・援助
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・題材探し：小論文作成「臓器移植について」 	<ul style="list-style-type: none"> ・小論文題目リストを準備する
設定	<ul style="list-style-type: none"> ・資料や情報の収集：図書館、インターネット、身近な人々 ・学習課題の発表：「移植医療について」 	<ul style="list-style-type: none"> ・養護教諭との連携を図る ・生徒同士による相互評価、意見交換
追究	<ul style="list-style-type: none"> ・調べ学習：文献、新聞・雑誌の記事、関連機関のホームページなどを分析し、現状を探る ・関係者に直接意見を聞きたい、自分の意見を言いたい！ ・校外協力者を探してみる ・中間発表：小論文作成「移植医療の現状について」 	<ul style="list-style-type: none"> ・意見の分かれる問題なので、一方にだけ偏って調査しないように助言する ・移植を担当した医師、大学教官、移植コーディネーター、移植を待つ患者や家族の会などに連絡をし、インタビューへの協力を依頼する
追究	<ul style="list-style-type: none"> ・学習計画の見直し：インタビューのための準備をする ・電話、手紙、電子メールなどでインタビューを依頼する ・休日や長期休業日を利用して、インタビューに行く ・関係者の意見や自分の考えを他の人々に知らせたい！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・正式の協力依頼文書を作成、送付 ・学年教師団や生徒指導部などに働き掛け、特別活動

高等学校普通科における総合的な学習の時間の構想に関する一考察

	・学校に呼び掛け、生徒や保護者を対象に移植コーディネーターの講演会を企画し、当日は司会・運営の係を担当する	として講演会を開催できるように交渉する ・生徒や保護者向けの案内文を作成させる
まとめ	・講演会への生徒の感想をまとめる ・学習成果発表会：小論文作成「移植医療の現状と課題」 ・学習活動の整理、振り返り	・活動場所、利用機器などの調整 ・生徒同士による相互評価、意見交換 ・学習活動全体を反省させ、次年度以降に生かす

個人カルテへの記入例

個人カルテ No. 1		総合担当教師：蔵王 雪子	
1年3組5番生徒氏名：阿武隈 三平			
月日	内 容	自評	サイン
4/24	小論文の題目：「移植医療について」		阿
5/1	選択理由：最近、心臓移植のために渡米したのに、結局移植を受けられずに亡くなった幼児とその両親についてのテレビ番組を見て、とっても感動したので、このことをもっと知りたいと思ったから。		阿
5/8	活動概要：できれば実際に移植医療に携わっている医療関係者の人たちに直接会って話を聞いてみたい。		阿
5/8	伸ばしてほしい能力：自分とは全く違う境遇にある人々に共感する心をはぐんでほしい 複雑な意見を冷静に比較検討する判断力を身に付けてほしい 他の人々に自分の意見をはっきりと伝える表現力を身に付けてほしい		蔵
10/23	自分がこれまで出会った人の考えを、他の生徒たちにも聞いてもらえる機会を学校で実現させたい！		阿
10/23	LHRの時間を使って、阿武隈君の希望をかなえられるかどうか、生徒指導部の先生方に相談してみます。		蔵
10/25	生徒指導部より：学年の先生方の合意があれば、12月上旬に時間を設定することが可能です。		佐
10/29	学年会の結果：OK！ 急いで講師への連絡と具体的な実施要領を作成してほしい。		蔵

5.6 時間割への配置

総合的な学習の時間は、時期や内容によって望ましい活動時間が変わってくる。こうした状況に、できるだけ対応するように、柔軟な時間割の運用が必要になる。他方、活動時間を頻繁に変えると、毎日の時間割変更作業への負担が懸念される。活動時間を変更しても他の授業への影響が最小限に抑えられるように、時間割への慎重な配置を考えなければならない。そこで、本校の時間割を基に、週2時限の総合的な学習の時間を実施する場合を想定して、三通りの運用を考えてみた(図11参照)。

A：一回1時限の場合

曜	月	火	水	木	金
1					
2					
3					
4					
5					L
6					総
7	x	x	総	x	x

B：一回2時限連続の場合

曜	月	火	水	木	金
1					
2					
3					
4					
5					総
6					総
7	x	x	L	x	x

C：一回3時限連続の場合

曜	月	火	水	木	金
1					
2					
3					
4					
5					L
6					総
7	x	x	x	x	総

【凡例】
L：ホームルーム活動
総：総合的な学習の時間

時間割Cは、発表会などの場合で、ホームルーム活動と連携させて行うことを想定している。

図11 総合的な学習の時間を組み込んだ週時間割の運用例

5.7 総合的な学習の時間のための協働体制

教科・領域の枠を超えた総合的な学習の時間の指導には、全教職員や校外協力者による協働体制が不可欠である。ここでは、本格的な実施段階において必要となるであろう校内組織の相互のかかわりについて具体例(図12参照)を示すとともに、生徒への指導及び評価の流れを中心に、それぞれの役割について述べてみたい。

(1) 総合的な学習の時間推進委員会

主な役割

- ア 教職員への情報提供や、校内研修会の企画・運営を行う。
- イ 基本的な活動方針や年間指導計画の原案を作成し、職員会議に提案する。
- ウ 保護者、同窓会、地域の人々などに呼び掛け、校外協力者を募集する。
- エ 各学年・教科や校外協力者などとの連絡・調整を行う。

- オ 総合的な学習の時間の指導方法や評価の観点・方法を検討する。
- カ 生徒と教職員を含めた教育活動全体を評価し、次年度のための見直しを行う。

構成メンバーと役割分担：

- ア 教頭：全体総括，地方自治体・諸学校との連絡・調整
- イ 総務主任：保護者・同窓会などとの連絡・調整
- ウ 教務主任：教育課程全般，時間割の作成と運用
- エ 進路指導主任：企業・上級学校などとの連絡・調整
- オ 生徒指導主任：特別活動との調整，生徒の校外活動への指導などの検討
- カ 各教科主任：教科の専門性を生かした指導方法及び評価の観点・方法の検討

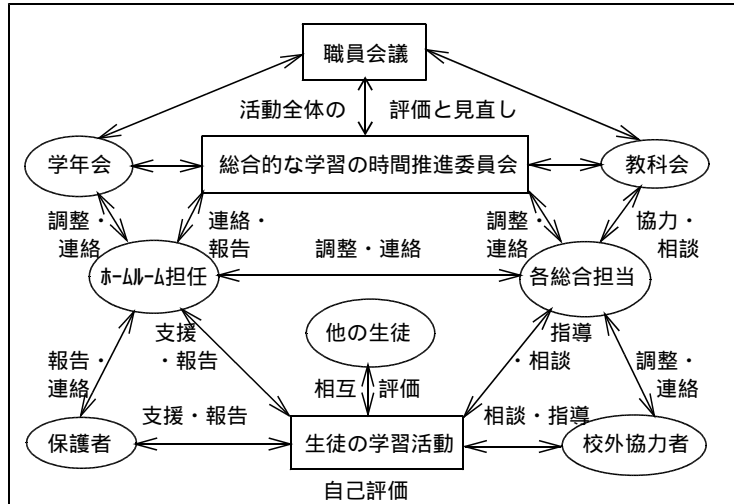


図12 実施段階の協働体制

(2) 各総合担当教師の役割

- ア 必要があれば，教科会に連絡をとり，専門的見地からの助言・協力を求める。
- イ 校外協力者との連絡・調整に当たる。
- ウ 生徒の自己評価，相互評価，校外協力者の評価などを集約する。
- エ 指導上必要と思われる事項を個人カルテに記入する。

(3) ホームルーム担任教師の役割

- ア 総合担当教師から個人カルテの回覧を受けて生徒の学習状況を把握し，必要に応じてホームルーム活動などで支援となる活動を行う。
- イ 生徒の学習状況を適宜，保護者に報告する。
- ウ 学期末・学年末に評価をまとめ，成績資料や指導要録などを作成する。

6 研究のまとめと今後の課題

6.1 研究のまとめ

本稿は，平成15年度入学生から年次進行で実施される，高校における総合的な学習の時間の可能性を探り，それを指導する高校教師の意識にささやかな変化をもたらすことを目指したものである。

戦後の日本社会は，急速な経済発展により，生活水準の向上と利便性を手に入れたのと引替えに，生活の中のゆとりや人々の連帯意識など，多くのものを犠牲にしてきた。その中で，子どもが置かれている状況は大きく変化した。かつて日本人の大半が第一次産業に従事していた頃，子どもは重要な働き手として，何らかの仕事を任せられ，子どもなりに工夫をしながら，責任を果たそうとしていた。そうした状況では，子どもが家庭や地域社会の中で自らの存在感・有用感を容易に感じることができた。しかし，現在では，子どもが家庭や地域社会のために何か工夫するという場面は，ほとんど見られなくなっている。彼らは，既に敷かれたレールの上を進むため，ひたすら勉強することだけを求められてるように思われる。確かに，明確な目標を掲げ，見通しをもって活動することは大切である。しかし，掲げるべき目標を自ら探し出したり，試行錯誤を繰り返しながら見通しを模索するためには，もっと大きなエネルギーが必要である。そのエネルギーこそ，[生きる力]そのものではないだろうか。

本研究では，総合的な学習の時間を，生徒一人一人の個性を生かして，生徒が自ら学び，自ら考え，工夫する，学びの自由化であるとした。そして，それは小学校三年から高校卒業までの約十年間とい

う長いスパンでとらえられるべきである。高校における総合的な学習の時間は、その最終段階に位置する。児童生徒は、小・中学校での活動を通して、様々な今日的課題や地域の特色に触れる機会をもつことになる。こうした小・中学校での経験の上に立って、高校では生徒一人一人の興味・関心から出発した学習活動が望まれる。すなわち、生徒が興味・関心をもつ事柄や身に付けた知識・能力を、学校という枠を超えた社会の中にどのようにかかわらせていくことができるのかを試みる活動である。

一方、生徒を取り巻く教師、学校及び社会は、互いに連携しつつ、それぞれが可能な範囲で創意工夫をして、柔軟にかつ最大限に、生徒の活動にこたえていくことを求められている。そのような周囲の人々からの反応を受け取ることによって、生徒は、学校という枠を超えた社会を構成する一員として、自分が社会から十分に認識されている存在であると実感することができる。同時に、自分もまた周囲の人々とともに、社会に働き掛けることができる存在であると自覚することができる。そして、このような学校や社会とのやりとりを積み重ねていくことによって、生徒は、自分が社会の中で何をしたいのか、どのような在り方生き方を望んでいるのかを、真剣に考えるようになるであろう。

6.2 今後の課題

総合的な学習の時間が、生徒一人一人の興味・関心から出発して進められる教育活動であるとするれば、そのすべての可能性について、事前に万全の準備をすることは、到底不可能である。むしろ、生徒の個別的、具体的な学習活動の過程において、生徒とともに教師や学校が、社会の協力を得ながら、創意工夫しつつ一步一步前進していくことが、結果的には生徒の[生きる力]をはぐくむことにつながるのではないかと考える。したがって、教師は、短期間で理想的な総合的な学習の時間を完成させようとするのではなく、最初は部分的な活動になったとしても、徐々にそのねらいを実現できるように、生徒や社会とともに努力を継続していくことが必要であると考え。そこで、以下の点を今後の課題として、その解決に向け努力していきたい。

(1) 総合的な学習の時間の学習活動に対する評価と単位の認定について

今回は、総合的な学習の時間の学習活動に対する評価について、ほとんど検討ができなかった。小・中学校と違って、高校の場合は、評価に基づいて、総合的な学習の時間の単位を認定するかどうかを議論しなければならない。そのためには、各学校の評価規定の早急な見直しも必要となる。

(2) 学校間・異校種間の連携体制の構築について

施設・設備面で、他の学校の協力を得ることによって、生徒の活動範囲が広がることは十分に考えられる。また、小・中学校とは、総合的な学習の時間における活動を通して、互いの姿を理解し合い、助け合える場面が多いはずである。中高連携の推進にも大いに役立つと思われる。

主な参考文献

全般的な参考文献

- | | |
|--|----------------|
| [1]文部省：「高等学校学習指導要領」 | 1999 |
| [2]文部省：「高等学校学習指導要領解説 総則編・各教科編・特別活動編」 | 1999・2000 |
| 第4章 | |
| [3]中央教育審議会：「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申)」 | 文部科学省ホムレク 1996 |
| [4]教育課程審議会：「幼稚園・小学校・中学校・高等学校・盲学校・聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について(答申)」 | 文部科学省ホムレク 1998 |
| [5]無藤隆・藤崎真知代・市川伸一著：「教育心理学」 | 有斐閣 1999 |
| [6]北海道立教育研究所：「平成12年度研究紀要第130号『総合的な学習の時間』指導資料」 | 2001 |
| [7]文部省：「小学校学習指導要領解説 特別活動編」 | 1999 |
| [8]文部省：「中学校学習指導要領解説 -特別活動編-」 | 1999 |
| [9]国立教育研究所公民教育研究室・教科教育開発研究室：「高等学校公民科の授業の改善に関する研究」 | 国立教育研究所 2000 |
| [10]岐阜県総合教育センター：「みんなで考えよう！岐阜の『総合的な学習の時間』」 | 2001 |
| [11]三宅章介：「『育てる』から『育つ』教育への展開をめざして -『課題研究』を通しての進路選択支援-」(『進路指導 5月号』第74巻第5号) | 日本進路指導協会 2001 |
| [12]広島県立教育センター：「研究紀要第27号別冊 高等学校における総合的な学習の時間の進め方に関する研究」 | 2001 |